

国立大学法人

長崎大学

NAGASAKI UNIVERSITY

公開シンポジウム

リスク社会をめぐる

人文社会科学の 超域的枠組み構築へ 向けて

長崎大学重点研究課題

「リスク社会」を生き続けるための
人文社会科学の超域的研究拠点形成

入場
無料

事前申し込み不要

Symposium

2018 **2/7** Wednesday

14:30~18:30

長崎大学 文教キャンパス
総合教育研究棟3階 31番講義室

リスク社会をめぐる人文社会科学の 超域的枠組み構築へ向けて

日時／2018年2月7日(水) 14:30～18:30

会場／長崎大学 文教キャンパス 総合教育研究棟3階 31番講義室

現代世界におけるリスクは極めて多くの要因が複雑に絡み合い、ますます予見不可能なものとなっている。様々なレベルの社会的カタストロフィが現実味をおびてくるなかで、人類が21世紀を生き残り、100年後も人々が幸福に生きられる社会を実現するために、人文社会科学はどのような貢献ができるだろうか。

かつて社会学者のU・ベックが指摘したように、近代における産業化の帰結として到来した「第二の近代」は「リスク社会」として特徴づけられる。そこでは、モダンティの持続的な発展および産業社会の存続可能性自体が、その前提としてリスクを内包している。そして、そのリスクはグローバルで多層的な連関をもつため、極めて不確実かつ予見困難なものとなっている。

このようなリスクの具体的な評価と回避は、一般的には科学的課題として対象化される。しかし、実際には現代社会における科学的な営為自体、価値・倫理・信仰などと分かちがたく結びついている。なぜなら、「幸福な生活」自体がすでに科学技術なしには成り立たない状況において、それを脅かすリスクの回避が科学的使命となるため、「幸福とは何か」についての哲学・倫理・宗教的命題自体が必然的に科学のなかに組み込まれるからである。つまり、現代社会特有のリスクには自然科学的要因と人文社会科学的要因が密接に絡み合っており、その対処には文理の枠を越えた学際的連携が必要なはずである。

本シンポジウムでは、自然科学との連携も視野に入れながら、リスク社会を捉えるための人文社会科学諸分野の超域的枠組み構築の可能性について議論する。特に、リスクの認識に基づく行動や連帯がリスク社会においてどのような意味をもつかという点について、「個人化」や「不安」といった問題に焦点をあてながら検討する。

Program

基調講演

伊藤美登里 大妻女子大学 教授

リスク社会を生きるということ

いとうみどり／専門は社会学、研究テーマは個人化社会における社会的包摂の問題など。
 主著に『ウルリッヒ・ベックの社会理論—リスク社会を生きるということ』(2017、勁草書房)、
 『リスク化する日本社会—ウルリッヒ・ベックとの対話』(共編、2011、岩波書店)



研究報告

高倉浩樹 東北大学 教授 **気候変動研究から見えてくる文化の可塑性と不適応**
—シベリア先住民研究より

南 誠 長崎大学 准教授 **リスク社会における境界文化の創発性**
—中国帰国者の「存在論的不安」の対処法を手がかりとして

鈴木英明 長崎大学 准教授 **奴隷制とリスク、奴隷制廃止とリスク—世界史的視点から**

総合討論

コメント・司会 **滝澤克彦** 長崎大学 准教授

◎事前申し込み不要 ※どなたでも予約なしでご自由に参加いただけます。(無料)

◎問合せ先 長崎大学多文化社会学部(滝澤) 長崎県長崎市文教町1-14

TEL&FAX.095-819-2916

✉ takizawa@nagasaki-u.ac.jp

主催／長崎大学重点研究課題「リスク社会」を生き続けるための人文社会科学の超域的研究拠点形成



国立大学法人

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY